

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26293488

研究課題名(和文)小児外来でのファミリーパートナーシップモデルに基づく多職種による育児支援の有効性

研究課題名(英文)Effectiveness of childcare consultation services based on Family Partnership Model by health professionals at pediatric outpatient department

研究代表者

三國 久美(Mikuni, Kumi)

北海道医療大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：50265097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,900,000円

研究成果の概要(和文)：小児科外来での看護職によるファミリーパートナーシップモデル(FPM)に基づく育児相談の有効性を明らかにした。看護職は、小児科外来で週1回の育児相談に10か月間従事した後、FPM講習会を受け、引き続き育児相談に従事した。FPM講習会の受講前の育児相談利用者17人と受講後の育児相談利用者27人による相談内容の評価を比較した結果、受講前は88.2%、受講後は96.3%が「この相談は役に立った」および「サポートされたと感じた」と回答した。また、受講前は70.6%、受講後は96.3%が「育児相談で得た情報は役に立った」と回答した。これらの結果から、小児科外来でのFPMに基づく育児相談の有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study revealed the effectiveness of childcare consultations based on the Family Partnership Model (FPM) conducted by nurses at pediatric outpatient departments. In the study, nurses engaged in weekly childcare consultation for 10 months at pediatric outpatient departments, took FPM seminars, and then continued to provide childcare consultations. The study compared two groups of participants: one group (n = 17) who had consultations with nurses who had not taken FPM seminars with another group (n = 27) who used the consultation service after nurses received the FPM seminars. The results showed that 88.2% of the first group and 96.3% of the second group reported the childcare consultation to be useful, and felt supported by nurse consultants. Furthermore, 70.6% of the first group and 96.3% of the second group replied that information obtained from the nurses was helpful. These results suggest that childcare consultations based on FPM at pediatric outpatient departments is effective.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児科外来 育児支援 ファミリーパートナーシップモデル

1. 研究開始当初の背景

日本では、少子化や核家族化が進行し、育児環境が変化している。また、児童虐待は増加の一途をたどっており、児童相談所の虐待相談の内訳をみると心理的虐待が年々増加し、2016年には身体的虐待を抜き、最も多かった。児童虐待の予防のための対策は急務であり、出産後早期からの親への育児支援が重要である。このような育児をめぐる現状において、多くの小児と親が訪れる小児科外来では、育児支援の機能が期待されている。

欧州では、1990年代後半から、EUとWHOによる「子どものこころの健康促進のためのプロジェクト」(European Early Promotion Project)が取り組まれている。このプロジェクトの理論的な基盤が、Day. C博士により開発されたファミリーパートナーシップモデル(Family Partnership Model、以下、FPM)である。この理論に基づき、支援者は親の長所や能力を認め、価値を尊重し、親とのパートナーシップを促進するための信頼関係を築く。親と対等な関係で育児について話し合い、援助プロセスを促進する面接法を学ぶために、支援者は講習を受ける。欧州において支援者として講習を受け、育児支援を実施しているのは、主に保健師などのプライマリヘルスケアを担う看護職であり、講習の受講により支援の質が向上するという効果が明らかにされている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、欧州で普及しているFPMに基づく育児支援スキルの講習会(以下、FPM講習会)を受講した看護職が中心となって、小児科医、臨床発達心理士、作業療法士、言語聴覚士等を含めた多職種との協働による小児科外来での育児支援のための相談を実施し、その有効性について検討することである。

3. 研究の方法

本研究は、1)FPM講習会の企画、実施および評価、2)小児科外来での育児相談の実施と相談利用者からの評価の2つを実施した。それぞれについて、年度別にみた実施内容を図1に示した。また、研究方法は以下のとおりである。

1)FPM講習会の企画、実施及び評価

FPM講習会の企画と開催準備

研究代表者及び一部の研究分担者は、本研究開始前に英国で開催されたDay. C博士により開発されたファミリーパートナーシップモデル(Family Partnership Model、以下、FPM)に基づく講習会を主催するためのトレーニングプログラムに参加した。また、本研究でFPM講習会を開催するために、日本の実状に合った講習会の内容や運営方法を検討した。その結果、本研究では産後早期から家族を支援する看護職を想定し、2日間で学べ、かつ支援に役立つ内容を取り入れた。また、

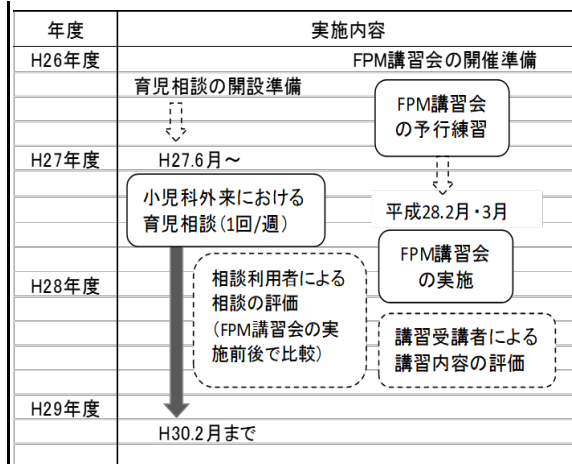


図1 年度別にみた本研究の実施内容

FPM講習会の実施に先立ち、計2回の予行練習を実施した。

FPM講習会の開催

小児科外来で育児支援に従事する看護職3名を対象者として、平成28年2月(DAY1)と3月(DAY2)にFPM講習会を開催した。FPM講習会の内容を表1に示した。

表1 FPM講習会の内容

DAY1(1日目)
・胎児・乳幼児の発達科学による知見の概要
・妊娠および胎児・乳幼児の発達に対する親・家族の影響
・ファミリーパートナーシップモデルとは
・産前産後の家族へのコンタクトを考える
・産前・産後プロモショナルガイド(PG)の概要
・参加者がペアになりPGを用いた実践の練習
DAY2(2日目) ※DAY1の1か月後に実施
・DAY1で学んだことの振り返り
・産後プロモショナルガイド(PG)を使用した経験の共有
・支援のためのエコロジカルモデルの活用
・Strengths & Needs サマリーの使用
・PGシステムの使用を継続するために必要な支援とは

③FPM講習会の評価と分析

DAY1の講習会の終了時に学んだ内容、産後の親子への支援にプロモショナルガイド(以下、PG)はどのように役立つと考えるかを自由記載で尋ねた。また、DAY2の講習会の終了時に自記式質問紙を用いた調査を実施した。調査項目は、PGを用いることにより、「家族支援を効果的にするか」「家族は利益を得るか」「個々の家族のニーズを見つけて対処することに適しているか」などの7項目とし、各項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの6段階で回答を得た。また、2日間全体の評価として、講習担当者の対応や講習の構成、内容など11項目について4段階もしくは5段階で評価を得るとともに、受講によって自分の実践がどのように変わると思うか、良かった点や悪か

った点などについて自由記載で回答を得た。分析は、それぞれの項目について、記述統計を実施した。また、自由記載で得た内容は、類似するものをまとめた。

2)小児科外来での育児相談の実施と相談利用者からの支援の評価

小児科外来での育児相談の概要

育児相談の担当者は、保健師もしくは助産師で、新生児・乳幼児訪問指導やデパート等で開催される育児相談に従事した経験がある者3名であり、交代して毎回1名が担当した。育児相談の実施頻度は、週1回である。小児科外来の診療時間内に待合場所で、受診した児に付き添う保護者に声をかけ、希望者にその場で育児相談を実施した。なお、相談内容や保護者の希望に応じて個室に移動して実施した。また、育児相談の担当者は育児相談終了時に育児相談記録を作成した。

育児相談の利用の実態調査と分析

育児相談を利用した子どもの属性(性、年齢)、相談内容、相談の所要時間について、育児相談記録の記載内容から把握した。

育児相談の実態を検討するために、2015年6月から2018年2月までに実施した育児相談の記録をもとに、単純集計を実施した。

③相談利用者からの支援の評価と分析

育児相談を使用した親のうち、調査に承諾が得られた者に自記式質問紙調査を実施した。データ収集項目は、支援者から得た情報は役立ったか、自分の気持ちを十分に話せたか、③支援者からサポートを得たと感じたか、④自分や子どもが尊重されていたか、⑤相談を受けて役に立ったかの5項目であり、各項目について「大変そう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で回答を得た。さらに、相談を受けて役に立った理由と相談を受けたことによる変化について、自由記載で回答を得た。

分析では、育児相談担当者がFPM講習会を受講することにより、受講する前よりも相談利用者による評価が向上したかを検討した。具体的には、FPM講習会を受講する前(H27.6月からH28年3月まで)に回答を得た17人と受講後(H28.4月からH30年2月まで)に回答を得た27人のデータについて、統計学的検定を実施して差異がみられるか検討した。

3)倫理的配慮

本研究でFPM講習会を開催した際に用いた教材の使用および日本での講習会の開催は、開発者であるDay. C博士から承諾を得た。また、全てのデータ収集時には、書面と口頭で対象者に研究の主旨と倫理的配慮の説明を行い、同意を得た。本研究は、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会(承認番号14N038038)および北海道医療大学個体差医療科学センター倫理委員会(受付番号第2014-017号)の承認を得て実

施した。

4. 研究成果

1)FPM講習会の評価

DAY1の講習会の終了時の評価

DAY1で学んだ内容として、「妊娠期からのかかわりの大切さ」、「乳児の脳の発達の過程と逆境的環境が発達を妨げる要因となること」、「支援者として意図をもって両親に関わること」、「支援者と両親の考え方にズレが生じないように支援するためのスキル」などの内容が挙げられた。

産後の親子への支援にPGはどのように役立つと考えるかという問いに対して、「PGを利用することで、支援者ではなく親の話したいことに焦点を当てて話すことができる」、「PGは、単に情報を引き出すツールだけではなく、支援者が親と共に考察し、今後の計画を導くためのツールであることがわかった」、「支援者からの一方的なアドバイスにならないように、親や家族主体の計画が立てられるように導いていくのは難しいが、ぜひ役立てたい」という記載があった。

DAY2の講習会の終了時の評価

PGを用いることにより、「家族支援を効果的にするか」という問いに1名が「とてもそう思う」、2名が「そう思う」と回答した。「家族は利益を得るか」という問いに、3名全員が「そう思う」と回答した。「PGは家族に対して分かりやすく使いやすい」という問いには、1名が「そう思う」、2名が「多少そう思う」と回答した。「個々の家族のニーズを見つけて対処することに適しているか」の問いには、1名が「とてもそう思う」、2名が「そう思う」と回答した。「私は家族支援にいつもPGを使いたい」という問いに2名が「そう思う」、1名が「多少そう思う」と回答した。「PGは、私が支援している家族へのアプローチに適している」との問いには、2名が「そう思う」、1名が「多少そう思う」と回答した。「私はPGを効果的に利用するために必要な資質とスキル、知識を持っている」との問いには3名全員が「多少そう思う」と回答した。

③全体的な評価

表2にFPM講習会の評価の結果を示した。

表2 FPM講習会の評価

質問項目	非常に 思う	少し 思う	あまり 思わない
自分が尊重されたと感じた	2	1	0
自分の話に耳を傾けてもらった	2	1	0
講習担当者は熱心だった	3	0	0
自分の日々の実践に役立った	2	1	0
胎児期と乳幼児期のスキルと知識を高めた	3	0	0
生後早期の育児に関するスキルと知識を高めた	2	1	0
産後のPGに関するスキルと知識を高めた	2	1	0
ニーズチェックリストに関するスキルと知識を高めた	2	1	0
学んだことを使用する自信がある	0	2	1
この講習会は良く構成されている	2	1	0
この講習会を同僚に勧めたい	3	0	0

全ての項目において、「全くそう思わない」と回答した者はいなかった。

④受講者による評価に基づく FPM 講習会の有用性と今後の課題

FPM 講習会の受講者は、DAY1 の FPM 講習会の終了時に妊娠期からの支援の重要性や乳児の脳の発達とその影響要因を学んだと回答した。DAY1 では、育児支援を行う上で土台となる知識として、これらに関連するエビデンスの高い先行研究の知見を紹介しており、このことが受講者にとって新たな知識の獲得につながったと考える。また、受講者から得られた評価に、親を支援するためのスキルが学べたことや、PG の有用性が挙げられた。受講者同士で PG を使った演習を行ったことにより、単なる知識にとどまらず、スキルの修得が可能になったことが推察された。

DAY2 の FPM 講習会の終了時に、受講者の大多数から PG に対する肯定的評価が得られたものの、「私は PG を効果的に利用するためのスキル、知識を持っている」という問いに「そう思う」と回答した者はいなかった。さらに、「学んだことを使用する自信があるか」という問いに「あまりそう思わない」と否定的な回答をした者がいた。FPM 講習会では、知識の修得のみならず、優れた支援ができるようになること、つまり行動変容を目指している。本研究では、講習終了後の受講者の行動変容まで確認していないが、これらの結果は、学んだことを日々の育児支援に取り入れる自信が持てず、行動変容に至らない受講者がいる可能性を示している。行動変容のためには、最も大切にしなければならないのは現場の上長（受講者の直接の管理職）であることから、職場の環境や上司や同僚の理解が得られそうにないことがこの結果に影響した可能性もある。また、行動変容を可能にするには、研修終了直前にアクションプランを作成することが有効であることが指摘されている。今後、FPM 講習会の受講者が自信をもって学んだことを活用し、行動変容できるようになるためには、受講者が自信を持てるような講習内容や方法の工夫のみならず、講習会の終了時に、アクションプランを作成してもらうことや、現場に戻ってからの受講者へのサポート体制も含めた検討が必要である。

2) 小児科外来での育児相談の実施と相談利用者からの評価

育児相談の実施状況

育児相談は、平成 27 年 6 月から平成 30 年 2 月まで計 105 回実施した。育児相談を利用したのは計 248 人で、全員が母親であった。1 回あたり平均 2.4 人が利用し、所要時間は平均 16.7 分（3 分から 100 分まで）で、最頻値は 10 分であった。相談の対象となった子どもの属性は、男児が 130 人、女児が 117 人、両方が 1 人であり、年齢は、平均 1.9 歳（0 か月から 14 歳まで）で、最頻値は 0~1 歳であった。

育児相談利用者の主な相談内容を表 3 に示した。相談内容を分類したところ、最も多かったのは授乳や栄養のこと（86 人）で、次に多かったのは発達（76 人）であった。

表 3 育児相談利用者の主な相談内容

相談内容	件数(%)
授乳や栄養のこと	86(35.5)
言語の発達	76(30.6)
生活リズムの乱れ・夜泣き	27(10.9)
清潔やスキンケア	23(9.3)
排泄に関すること	22(8.9)
受診した児の同胞への対応	20(8.1)
育児不安・ストレス	15(6.0)
行政サービス等の情報提供	10(4.0)

注:複数回答、()内は248人に対する割合。

育児相談の利用者からの支援の評価

育児相談の利用者 248 人中 44 人から、支援の評価のための質問紙調査に協力が得られた。支援の評価を表 4 に示した。

表 4 育児相談利用者からの支援の評価

質問項目	大変思う/ 思う	どちらとも いえない	思わない/ 全く思わない
支援者から得た情報は役立つ	38(86.4)	4(9.1)	2(4.5)
自分の気持ちを十分に話せた	42(95.5)	1(2.3)	1(2.3)
支援者からサポートされたと感じた	41(93.2)	2(4.5)	1(2.3)
自分や子どもが尊重されていた	39(88.6)	5(11.4)	0
相談を受けて役に立った	41(93.2)	2(4.5)	1(2.3)

育児相談の利用者からの支援の評価は、おおむね高く、「大変思う/そう思う」という回答が約 9 割であった。相談を受けて役に立った理由として、「相談しなかった内容が解決した」、「医師に聞くほどでもないと思うことも聞けた」、「話すことで気持ちが楽になった」、「ストレス解消になった」という記載があった。

相談を受けたことによる変化として、「何かあったら相談できる場があると知り、気持ちが楽になった」、「受けたアドバイスを取り入れてみた」、「前向きにもっと頑張ろうと思えた」、「気持ちが安定し、子どもに余裕をもって接することができた」という記載があった。

③FPM 講習会を受講した担当者による育児相談の評価

育児相談担当者が FPM 講習会を受講することにより、受講する前よりも相談利用者による評価に違いがみられるか検討するために、FPM 講習会を受講する前に回答を得た 17 人と受講後に回答を得た 27 人のデータを比較したところ、「支援者から得た情報は役立つ」という設問に「大変思う/そう思う」と回答した者が、受講前は 70.6%であったのに対し、

受講後は 96.3%と増え、有意差がみられた (p=.027)。

FPM 講習会を受講することで、育児相談担当者は母親の立場を尊重することの重要性を学び、母親が必要としている情報を厳選して提供できたことがこの結果に反映したと考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

三国久美, 草薙美穂, 澤田優美, 齋藤早香枝, 岡光基子, 矢郷哲志, 廣瀬たい子: ファミリーパートナーシップに基づく育児支援講習会の効果, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 査読無, Vol.24, pp.31-36, 2017

三国久美, 草薙美穂, 澤田優美, 齋藤早香枝, 横田広子: 小児科外来における育児相談の実態と利用者による評価, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 査読無, Vol.23, pp.43-48, 2016

[学会発表](計2件)

Kumi Mikuni, Miho Kusanagi, Yumi Sawada, Sakae Saito, Motoko Okamitsu, Satoshi Yago, Taiko Hirose: Effects of the childcare support seminar based on Family Partnership Model, TNMC & WANS International Nursing Research Conference, THAI, 2017

三国久美, 澤田優美, 草薙美穂, 齋藤早香枝: 小児科外来における育児相談の実態と評価, 第63回日本小児保健協会学術集会, 埼玉, 2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

三国 久美 (MIKUNI, Kumi)
北海道医療大学・看護福祉学部・教授
研究者番号: 50265097

(2)研究分担者

廣瀬 たい子 (HIROSE, Taiko)
東京有明医療大学・看護学部・特任教授
研究者番号: 10156713
(平成29年度より連携研究者)

大久保 功子 (OKUBO, Noriko)
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授
研究者番号: 20194102

岡光 基子 (OKAMITSU, Motoko)
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授

研究者番号: 20285448

草薙 美穂 (KUSANAGI, Miho)
日本医療大学・保健医療学部・准教授
研究者番号: 90326554

澤田 優美 (SAWADA, Yumi)
天使大学・看護栄養学部・准教授
研究者番号: 00585747

柴田 睦郎 (SHIBATA, Mutsuo)
北海道医療大学・予防医療科学センター・准教授
研究者番号: 10438385

木村 恵 (KIMURA, Megumi)
北海道医療大学・リハビリテーション科学部・講師
研究者番号: 30708582

小林 健史 (KOBAYASHI, Kenji)
北海道医療大学・リハビリテーション科学部・助教
研究者番号: 60583903

堀内 ゆかり (HORIUTI, Yukari)
九州産業大学・人間科学部・教授
研究者番号: 70235761
(平成26年度から平成28年度まで)

(3)連携研究者

齋藤 早香枝 (SAITO, Sakae)
札幌保健医療大学・看護学部・教授
研究者番号: 50301916

(4)研究協力者

矢郷 哲志 (YAGO, Satoshi)